

本日の学び テーマ:「イスラエルへの審判」 テキスト:アモス書1章1節、2章6-16節

【理解の手がかりとして】

預言者アモスが活動した時期は紀元前 760～750 年とされ、イスラエル王ヤロブアム二世の治世にあたる。彼はユダのテコア（ベツレヘムの南9キロにある田舎町）出身で、半農半牧の素朴な生活を営む一庶民であった。——「わたしは預言者ではない。預言者の弟子でもない。わたしは家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ」（アモス 7:14）。

彼は神の召命に応じ、北王国イスラエルの首都サマリア、後にはベテル（※）に赴き、激しい口調で神の審判を叫んだ。

※「ベテル」とは、南ユダとの国境にある北王国の聖所で、「神の家」を意味する。アブラハムはここに祭壇を築いて神を礼拝し、ヤコブがここで天の幻に接してから「ベテル」と名づけた。士師時代には神の箱のための幕屋があり、サムエルはここで民の裁きを行った。王国分裂後、ヤロブアム一世はこの町を金の子牛礼拝の首座の一つとした。預言者ホセアはここをベト・アベン（邪悪の家）と呼んだ。また宗教改革者ヨシヤは宗教の肅正のためにベテルの聖所を破壊した。

アモスの時代は北イスラエルが大いに栄えた時代で、領土もソロモン王国に比肩しうるほどに拡張した。しかしその「富」の繁栄の影には、社会的不正、上層階級の退廃と高慢があった。アモスはそれを見過ごすことが出来ず、貧しい庶民の味方として、痛烈な社会批判を行った。また、宗教祭儀に関する墮落に関しても、神の厳しい処罰の託宣を告げた。

アモス書の全体の構成は次のとおり。

- ✧ 隣接諸国の罪とイスラエルの罪（1－2 章）
- ✧ イスラエルの罪と不義に対する糾明（3－6 章）
- ✧ イスラエルに下る災禍の幻（7－9 章）

アモスは1章から、まず周辺諸国を順に取り上げ、その罪をかぞえ批判していく。ダマスコ、ガザ、ティルス、エドム、アンモン、モアブ、ユダ、それぞれの町々の「三つの罪、四つの罪のゆえに」とある（合計7つの罪、いわゆる完全数であり、それほどに罪が充満しているという意味か）。

北イスラエルの人々は、アモスが、七番目にユダ（アモスの自国）の批判を始めたのに対し驚いただろう。もしかしたらそのユダの罪の告発が最後と思いながら「対岸の火事」として評論家然と聞いていたかもしれない。まさかその後に自分たちのイスラエルが罪暴かれるとは……。しかもその8番目の批判こそが最も長く、まるでその前の7つはその批判の序章であるかのようであったから、また驚いたであろう。

2章6節以下8節まで、イスラエルの罪が数えられている。貧しい者、弱い者、悩む者、女、彼らを虐げ、踏みつけている現実を、隣人として認めていない現実が数え上げられて

いく。祭壇の前に質草の着物を敷き、その上に横になって酒にくれている人々の姿…。

そこでアモスは、9～12 節にて、これまで主が与えられた恵みを想起させている。出エジプト、荒野の 40 年、アモリ人の地を与えた事（民 13:29—）、ナジル人（民 6 章）と預言者を与えた事。これほどの恵みを与えてきたのに、しかしお前達イスラエルはナジル人に酒を飲ませ、預言者の口を封じた、と告げる。

13 節の言葉「麦束を満載した車がわだちで地を裂くように、お前たちの足もとの地を裂く」とは衝撃的な言葉。具体的には当時起こった大地震（紀元前 760 年頃）を指すよう（1:1）。そしてその事態の中では、あらゆる力（素早い者、強い者、勇者、弓を引く者、足の速い者、馬に乗る者）が無効と化するのだと言われる。

数え切れない恵みを忘れる人間に対する主の悲しみと怒り。豊かさに埋没し、隣人を虐げ、自分だけの享楽に生きる人間の罪を、このアモス書は明らかにする。——いのちの為の「富」が、いつのまにか「富」のためのいのちになる時、コントロールできなくなり、崩壊していくのである。

（聖書教育より）

「アモスの言葉を聞いても人々は悔い改めることなく、アモスは祭司アマツヤによってベテルから追放されてしまい、数十年後イスラエル王国は滅亡する事となります。現代を生きる私たちにとっても、アモスの審判の言葉は、決して人ごととして聞いてはならないのではないのでしょうか。」（聖書の学び～ベテルから追放されたアモス）

「神さまは何を、そして誰を、大事にしてほしいと願っていると思いますか？」（子どもクラス）